

香川県農業試験場研究報告 第56号(2003年10月) 5-18

- 1.普通期栽培における水稲中生品種の外観品質確保からみた収穫最適日は籾の水分分布が28~29%を中心に最もシャープな山を形成する日の1~2日後、収穫適期の早限は最適日の2日程度前、晩限は「オオセト」、「あきげしき」、「ヒノヒカリ」では最適日の4日後頃、「コガネマサリ」では6~7日後であった。
- 2.この時期は収量と千粒重を確保するための収穫適期幅とほぼ一致していた。
- 3.着生籾数が多いと収穫適期幅が短くなる傾向がみられた。
- 4.登熟期間中の日平均気温の積算値である積算気温は、品種間差や年次間差が大きく収穫適期判定基準としての汎用性が低かった。
- 5.黄変籾率は品種による違いがみられるだけでなく、「コガネマサリ」以外の品種については着生籾数による変動が大きく、収穫適期判定基準としての汎用性が低かった。
- 6.平均籾水分はすべての品種に対して汎用性が高かったが、収穫適期の事前予測に適さなかった。
- 7.出穂後の日平均気温から10°Cを差し引いた値の積算値である有効積算気温 ΣT_{10} を新たな収穫適期判定基準として設定したところ、品種や年次を問わず汎用性が認められた。

キーワード：普通期水稲、黄変籾率、籾水分、有効積算気温、玄米品質